

福井県埋蔵文化財調査報告 第115集

# 前谷遺跡

— 県道中川松岡線道路改良事業に伴う調査 —

2 0 0 9

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

## 序 文

本書は、県道中川松岡線改良事業に伴い平成19年度に実施した、前谷遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。

前谷遺跡は、あわら市金津地区前谷付近に所在し、坂井平野の北東に接する加越山地の低位面に立地しています。坂井平野には数多くの遺跡が分布していることが知られており、これらの多くは主要河川である竹田川や兵庫川などの流域に形成される自然堤防上に立地しています。

近年、坂井平野では南部を中心としていくつかの発掘調査が実施されており、様相が次第に明らかになりつつあります。しかし、前谷遺跡周辺では、これまでまとまった規模の調査は、実施されていません。

今回の発掘調査では、溝、柱穴、旧河川など遺構の一部を確認しましたが、前谷遺跡全体の内容を把握するには至っていません。しかし、こうした調査の積み重ねが、平野内に分布する遺跡の様相や、さらには広く福井県の歴史をより一層明らかにしていくことにつながるようになると思います。

本書が、郷土の遺跡や遺物に対する理解をより一層深めていただくきっかけとなるならば幸いです。

最後に、発掘調査から本書の刊行に至るまで多大なご協力とご配慮を頂きました、地元の方々や関係諸機関の皆様方に、深く感謝申し上げます。

平成21年12月

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

所 長 吉 岡 泰 英

## 例 言

- 1 本書は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが県道中川川岡線改良事業に伴い、平成19年度に実施した前谷遺跡(福井県あわら市前谷・北・中川所在)の発掘調査報告書である。
- 2 前谷遺跡の調査は、福井県三国土本事務所の依頼を受けて福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが実施し、主査御嶽貞義・嘱託職員岩田直樹が担当した。
- 3 発掘調査は、平成19年4月2日から平成19年6月29日まで実施した。出土遺物の整理作業は、平成20年4月1日から平成21年8月31日まで、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターにて実施した。
- 4 本書の編集は御嶽があたり、御嶽、岩田、嘱託職員土谷崇夫が分担して執筆した。なお、執筆の分担は以下の通りである。  
御嶽 第1章、第2章、第3章第1節、第4章 土谷 第3章第2節 岩田 第4章補説
- 5 前谷遺跡に関するこれまでの成果の発表のうち、本書と齟齬のある場合は、本書をもって訂正したものと了解されたい。
- 6 検出遺構の図化・写真撮影は御嶽・岩田が、出土遺物の図化・写真撮影・写真図版作成は土谷が行った。
- 7 本書に掲載した地形図および遺構図は、株式会社日新企画設計に委託して作成したものを一部改変して使用した。また、上空からの写真は、航空測量時に有限会社ウイングが撮影したものである。なお、調査地の基準点測量・グリッド杭の設置は、株式会社林田調査設計に委託した。
- 8 遺物実測図と写真図版などの遺物番号は符合する。写真の縮尺は不同である。
- 9 本書における水平レベルの表示は、海拔高(m)を示し、方位は座標北を用いた。また、X・Y座標値は国土方眼座標系第Ⅵ系に基づく。
- 10 遺構番号は、遺構種別に関わらず、遺物の出土した遺構などに通し番号を付した。
- 11 挿図の縮尺は、挿図ごとに記した。
- 12 遺構図の縮尺は1/150・1/40を、遺物実測図の縮尺は1/3を基本とした。しかし、種別や個体の大きさにより、適宜これら以外の縮尺も使用した。
- 13 遺構図における断面の位置や立面等の見通し位置は、その両端を「-」で平面図中に示した。
- 14 断面図の土色は、小山正忠・竹原秀雄編 新版「標準土色帖」農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修に換る。
- 15 遺物観察表の計測値については、土器・陶磁器等は口径・底径・器高、それ以外の遺物は高さ(縦)・幅(横)・厚さ(奥行)を基本とした。
- 16 本書に掲載した遺物と調査に際して作成した図面・写真は、一括して福井県教育庁埋蔵文化財調査センターに保管してある。
- 17 発掘調査には、地元の方々の参加・ご協力を得た。また、遺物整理作業は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターの整理作業員があつた。

## 目 次

第1章 調査の経緯 .....	1
第1節 調査に至る経緯 .....	1
第2節 調査の経過 .....	1
第3節 遺跡の概要 .....	1
第2章 遺跡の地理的・歴史的環境 .....	3
第1節 地理的環境 .....	3
第2節 歴史的環境 .....	4
第3章 遺構と遺物 .....	9
第1節 遺構 .....	9
第2節 遺物 .....	16
第4章 まとめ .....	21
補説 中世坪江上郷と前谷遺跡 .....	22

## 写真図版目次

### 図版第1 遺跡・遺構

- |                  |                    |
|------------------|--------------------|
| (1) 調査地遠景(東より)   | (5) 土坑No.36(南より)   |
| (2) 調査地遠景(西より)   | (6) 溝No.66周辺(南東より) |
| (3) 調査区全景(真上より)  | (7) 調査区西側(南西より)    |
| (4) 土坑No.60(南より) |                    |

### 図版第2 遺物 陶磁器

- |                 |             |             |
|-----------------|-------------|-------------|
| 図版第3 遺物 (1) 越前焼 | (2) 土師器(外面) | (3) 土師器(内面) |
|-----------------|-------------|-------------|

- |                     |                 |
|---------------------|-----------------|
| 図版第4 遺物 (1) 須恵器・土師器 | (2) 石製品・金属製品・石器 |
|---------------------|-----------------|

## 挿 図 目 次

第1図	前谷遺跡の位置	3	第11図	遺構③	13
第2図	坂井平野(福井平野北部)の旧地形	4	第12図	遺構配置図③	14
第3図	前谷遺跡の周辺	5	第13図	河川旧流路	15
第4図	金津地域の主要古墳	6	第14図	陶磁器	16
第5図	櫛石造多層塔	7	第15図	越前焼	17
第6図	調査区全体図	8	第16図	土師皿および土師器	18
第7図	遺構配置図①	10	第17図	須恵器	18
第8図	遺構①	11	第18図	石製品・金属製品・石器	19
第9図	遺構②	12	第19図	経筒拓本(清滝庵寺経塚)	22
第10図	遺構配置図②	13			

## 表 目 次

第1表	前谷遺跡周辺の遺跡	6	第3表	遺物観察表	20
第2表	遺構観察表	9			

## 第1章 調査の経緯

### 第1節 調査に至る経緯

前谷遺跡は、縄文時代の遺物散布地として周知されている。しかし、福井県三国土木事務所による県道中川松岡線改良事業の新設道路予定地となり、現状保存が困難となったことにより、記録保存のための発掘調査を実施した。なお、新設道路は、南北に通る国道8号線から東へ分岐する東西道路である。

調査に先立ち、平成17年10月24日に実施した試掘調査では、遺跡範囲内に設定した試掘坑から多数の遺構が確認された。遺物は僅かな量の土師器・土師皿のみであったが、これにより前谷遺跡は古代・中世の遺跡も複合することが考えられるようになった。しかし、検出した遺構の性格や中心となる時期を把握することができなかった。遺構・遺物を確認した範囲約2,700㎡のうち、それらの希薄であった西側約1,600㎡の範囲は工事立会として対応することとなり、本格調査の面積は1,100㎡となった。

### 第2節 調査の経過

調査は、東西に長い調査区に国土座標に則る5m間隔の調査グリッドを設定して行った。調査区の南に位置するX=22015の線上をAとし、5m北上することにB(X=22020)・C(X=22025)とした。調査区北側に一部のみかかるX=22030はD線上となる。また、調査区西側のY=24930線上を①とし、5m東に進むごとに②(Y=24935)・③(Y=24940)・④(Y=24945)・・・とした。東端は⑩(Y=25010)である。調査グリッドは、X軸・Y軸の交点から北東の区画を単位とし、X軸・Y軸を表すアルファベットと番号を組み合わせて呼称した。遺構は土坑・溝など多数検出したが、埋土中に遺物を包含するもの、特徴的なものなどに限定して遺構番号を付した。また、遺構番号は、種別に拘らず、検出順の通し番号とした。

調査は、平成19年4～6月の3箇月に亘り実施した。調査区内の表土剥ぎ作業・グリッド杭の設置は先年度に為されていたが、現場事務所の設置・器材搬入などを経て、作業員を投入しての本格的な調査開始は4月16日(月)からである。調査区東側から、残存する表土や後世の造成土・僅かな遺物を含む包含層を剥ぎつつ遺構面を検出していった。遺構面の精査・検出作業は5月11日(金)から、遺構内埋土の半裁・掘削作業は5月14日(月)から開始した。検出した河川旧流路は、小規模ながら絶え間ない流水があった。比較的水量が多く、常時2台の水中ポンプを稼働しないと水は捌けず、排水しないと調査区の1/3程度が水没する状況であった。しかし、電気・電話・水道の各種ライフラインを欠く現場事務所であったため、発電機の騒音が周辺に与える影響を考えると、常時稼働は困難であり、毎日の冠水を受容せざるを得なかった。6月11日(月)にはすべての遺構を完掘した。そして、6月13日(水)には調査区全景などの撮影をして、作業員を伴う作業を終了した。その後も補足的な図化作業などを続けた。全体測量は、業者の都合と悪天候のため日程がずれ込み、6月23日(土)にラジコンヘリによる写真測量を実施した。なお、6月20日(水)に近在の金津東小学校校長から要請があり、金津東小6年生(2クラス:40名)を対象とした現地説明会を6月25日(月)に実施した。

### 第3節 遺跡の概要

**前谷遺跡の概要** 前谷遺跡は、縄文時代の遺物散布地として古くから知られていたようであるが、国道8号線改良工事に際して多量の遺物が確認されたことにより広く周知されるようになった。

古くは、福井県教育委員会による『福井県遺跡台帳目録 福井県埋蔵文化財包蔵地調査報告書』（1963年）や福井考古学研究会による『福井県における縄文式土器集成』（1969年）所収の「福井県における縄文遺跡地名表」に載り、その後、文化庁編集の『全国遺跡地図 18 福井県』（1980年）に登録される。

国道8号線改良工事の際の採集資料は、『福井県史 資料編13 考古』（1986年）に主要なものが掲載されている。その中で、遺跡の存続期間は中期中葉～後期前葉であり、その中心となる時期は中期後葉～末葉および一部に後期初葉を含む時期であるとされる。そして、遺物の集中する範囲が中川地籍・字名の場的畑地であったことから、遺跡名称を「的場遺跡」と改めている。

福井県教育委員会による『福井県遺跡地図』（1993年）では、範囲を前谷集落の南から北集落・中川集落の一部を含むものとし、遺跡名称を再び「前谷遺跡」に戻している。また、金津町教育委員会による『金津町埋蔵文化財調査概報』（1995年）中には、「附 金津町前谷出土の縄文土器」として前谷遺跡出土の資料が新たに提示されている。その解釈により、前谷遺跡の存続期間のうち下限の時期が、後期中葉にまで下降することが指摘されている。

今回、調査に先立つ試掘調査で、古代・中世の複合遺跡となることが確認された。また、検出した遺構の分布は、さらに前谷集落下層へ展開することを示しており、遺跡範囲が北へ広がる可能性がある。

**調査地の概要** 調査地は東西に細長く、東から西へ傾斜して低くなる。東側は、表土（黒色砂質土）直下で、礫を多く含む土壌（黄褐色土）に至る。この土壌は、粘性度が低く、水はけが良い。また、部分的ながら遺構面から比較的浅いところで岩盤に達する箇所がある。なお、遺跡南辺を西流する権世川の河床に同様な岩盤が露出しており、一連の岩脈が連なるようである。西側は、厚い表土（黒灰色粘質土）の下に比較的粘性が強い土壌（淡黄灰色土）が広がる。こちらは、水はけが悪く冠水する。このように、調査地の東西で地質の様相が大きく異なる。

遺構は調査区の東側に偏在しており、西側では小規模な河川旧流路と僅かな遺構を確認したのみである。遺構は土坑・溝・井戸などがある。埋土中に確認される木柱痕跡から柱穴と認識されるものもあるが、確実に建物を構成すると判断できるものは確認されない。

遺物は、散漫ながら調査地のほぼ全域にわたって確認された。しかし、ほとんどが表土中からの出土であり、過去の圃場整備などの影響により混じり合うような状況であった。

遺跡の営まれた時期については、遺構に伴う遺物が少なく明らかにすることが困難であるが、須恵器の甕や土師皿片・陶器片を伴うと見られる遺構が存在するため、おおまかに古代・中世を遺跡の存続期間と捉えることとする。また、これまで前谷遺跡は縄文時代の遺物散布地として周知されており、今回も縄文時代の石鏝を確認した。そのため、少なくとも縄文・古代・中世の遺構・遺物が複合する遺跡と言える。

#### 参考文献

福井県教育委員会 1963 『福井県遺跡台帳目録 福井県埋蔵文化財包蔵地調査報告書』

福井県教育委員会 1993 『福井県遺跡地図』

南洋一郎 1986 「先土器・縄文時代 28 の場遺跡」『福井県史 資料編13 考古』福井県

木下哲夫 1995 「附 金津町前谷出土の縄文土器」

『金津町埋蔵文化財調査概要 平成元年～五年度』金津町教育委員会

## 第2章 遺跡の地理的・歴史的環境

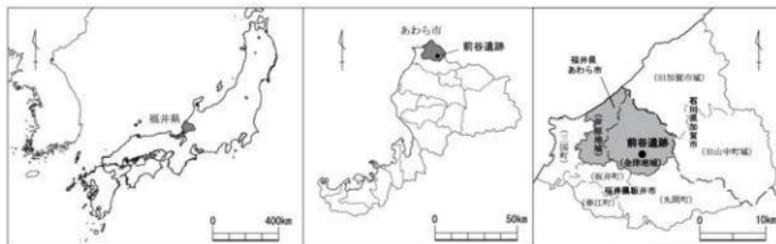
### 第1節 地理的環境

前谷遺跡は、福井県あわら市前谷を中心に所在する。福井県は、日本本州島ほぼ中央の日本海に面する位置にある。石川県の能登半島が日本海に大きく突出するのに対し、福井県の若狭湾は、西に接する京都府の丹後半島までを含め、本州島を半月形に抉ったような地形となる。若狭湾は、三陸海岸南部や志摩半島などととも典型的なリアス式海岸として知られる。敦賀市杉津から坂井市三国町安島にかけての海岸線は、越前岬を西端頂点として「く」の字状に延びており、越前海岸と総称される。越前海岸は、九頭龍川河口周辺やその南に砂嘴や砂州の痕跡と見られる砂地(三里浜砂丘)があるが、ほぼ急峻な海岸段丘や海蝕崖に占められており、なかでも東尋坊と呼ばれる断崖は著名である。

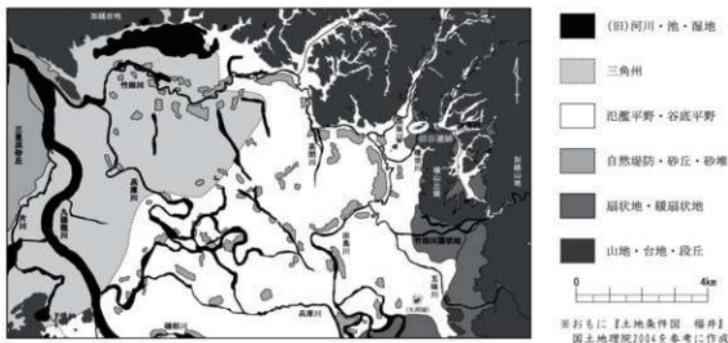
福井県は、敦賀市に北接する南越前町の山中峠・木の芽峠・橋の木峠の稜線を境とし、嶺北地方・嶺南地方に分けられる。この区分は、ほぼ旧国の行政区分である越前国・若狭国に相当する。ただし、敦賀市域の帰属は、前者区分では県南側の嶺南地方、後者区分では北側の越前国と相違する。なお、地形や文化・方言などの区分と合致し、実際的な地域区分と言えるのは前者の区分である。さらに、嶺北地方は東部の奥越盆地・北部の福井平野・南部の丹南盆地と区分され、嶺南地方は東部の敦賀市・西部の小浜市を中核として地域が区分される。また、福井平野は、ほぼ福井市域である南部を狭義の福井平野とし、北部を坂井平野として区別される。

あわら市は、平成16(2004)年3月に旧坂井郡の芦原町と金津町が合併してできた新市であり、福井県最北端に位置する。南に旧坂井郡の三国町・坂井町・春江町・丸岡町が合併した坂井市が、北東に石川県加賀市が隣接しており、北西は日本海に面する。市域北部は加越台地、市域東部の旧金津町域は加越山地が多くを占め、市域南西部は坂井平野の北端に当たる。坂井平野を形成した主要河川のひとつである竹田川は、市域を大きく蛇行しつつ西流し、坂井市へ抜けて兵庫川、そして九頭龍川へと合流する。

前谷集落は、あわら市東部である旧金津町域の中央から南側、加越山地と坂井平野北東端の接点となる位置にある。前谷遺跡は、前谷集落南から南西の北集落・中川集落にかけて展開する。遺跡の北から東に加越山地が、南に加越山地から派生する独立丘陵状の横山丘陵が迫り、西に坂井平野が広がる。また、北東から流れる権世川が、遺跡の東方にて清滝川と合流後、遺跡南辺を西流しており、さらに湾曲しつつ南西へ延びて竹田川に合流する。遺跡の北西には熊坂川が細かく蛇行しながら南西へ流れ、遺跡の西方にて竹田川に合流する。前谷遺跡の立地する箇所は山地低位面であるが、一部に権世川的作用に



第1図 前谷遺跡の位置 (縮尺1/3000万・1/300万・1/75万)



第2図 坂井平野(福井平野北部)の旧地形(縮尺1/15万)

よる緩扇状地にかかる。なお、この山地低位面と緩扇状地の境は、遺跡の中央からやや西側を南北に直線的に通っており、縦ズレの活断層として確認されている。

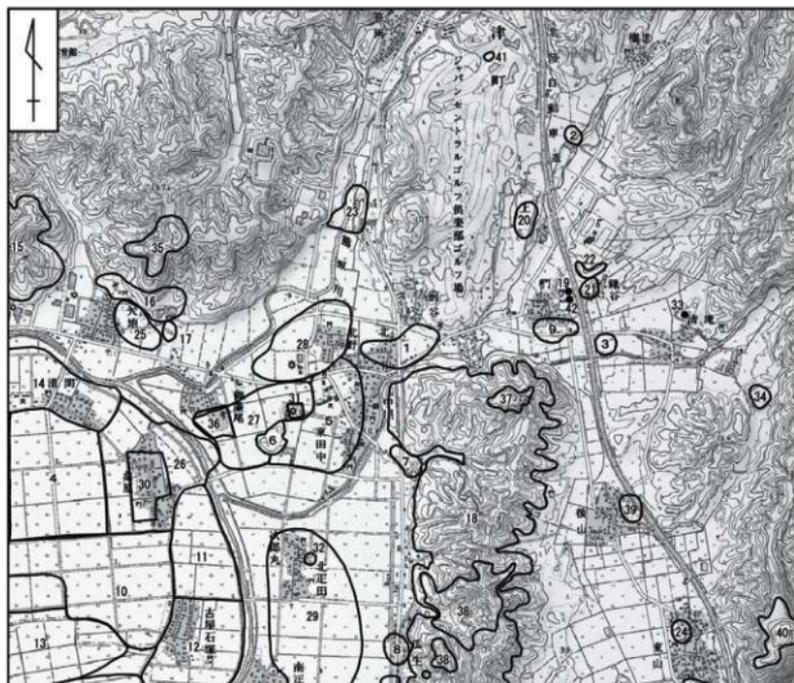
## 第2節 歴史的環境

前谷遺跡の周辺、半径3km程度の範囲に、縄文時代から中世の遺跡が数多く確認される(第3図・第1表)。しかし、発掘調査などにより内容の確認された遺跡は多くなく、大半が遺物散布地として周知されているのみである。以下、時代ごとに前谷遺跡周辺の遺跡を概述する。

**縄文時代** 縄文時代の遺跡は、前谷遺跡(1)以外に、権世神田遺跡(2)・清滝日川遺跡(3)・桑原西遺跡(4)・東田中遺跡(5)がある(以下、遺跡に付した番号は第3図・第1表と共通)。東田中遺跡(5)は、1991年に金津町教育委員会による発掘調査が実施された。その際、若干の縄文時代中期初頭の土器や、MT15～TK10窯式期並行と見られる須恵器坏蓋・坏身、土師器、越前焼片が出土した。

**弥生時代** 弥生時代の遺跡は、東田中岡山遺跡(6)・中川丸山遺跡(7)・瓜生遺跡(8)・櫛遺跡(9)・古屋石塚西遺跡(10)・古屋石塚北遺跡(11)・古屋石塚遺跡(12)・長屋平田遺跡(13)・清間遺跡(14)がある。東田中岡山遺跡(6)は、1990年に金津町教育委員会による試掘調査が実施されており、確認されたガラス製管玉や遺構密度の状況などから、遺跡の立地する小丘陵上に弥生時代の墳墓が展開するとされる。清間遺跡(14)は、1995・96年に金津町教育委員会による発掘調査が実施された。矢地山古墳群(15)は、そのうち1基が1998・99年に金津町教育委員会による発掘調査が実施されており、弥生時代後期の土器片多数と中世の加賀焼片若干量が確認された。それにより、古墳ではなく弥生時代の墳墓(矢地山1号墓)であり、遅くとも中世以降に変更されたものと考えられている。ただし、埋葬施設などの明確な遺構が確認されていないため、墳墓であるとする根拠をも欠く。

**古墳時代** 前時代から継続する遺跡以外に、上野後谷遺跡(20)・鎌谷遺跡(21)・鎌谷窯跡(22)や矢地山古墳群(15)・菅野古墳群(15の南西)・矢地古墳群(16)・八皇子山古墳群(17)・横山古墳群(18)・櫛古墳(19)がある。鎌谷窯跡(22)は、MT15～TK10窯式期並行の須恵器とともに円筒埴輪片が採集されるため、古墳時代後期前葉の須恵器・埴輪併焼窯とされる。ただし、未調査であり、窯体は未確認である。採集される埴輪片は、須恵質のものや尾張系の倒置技法が窺えるときれる。横山古墳群の椀貨山古墳は、確認される須恵器・埴輪の様相が共通するため、鎌谷窯の供給先の一つとされる。



第3図 前谷遺跡の周辺 (縮尺1/30,000)

※数値地図25000(地図書後)『鳥羽中川』国土地理院2001を改定

古墳群の多くは、基数・群構成などの把握がなされていない。矢地山古墳群(15)は、先述の矢地山1号墓から北の丘陵上に展開しており、最高所にタコ山古墳(前方後円墳：30～35m)がある。矢地古墳群(16)は、矢地山古墳群から東の丘陵裾、矢地集落北方に点在する3基の円墳の総称である。八皇子山古墳群(17)は、矢地集落東方の小丘上に展開しており、前方後円墳1基(八皇子山1号墳)・円墳5基・横穴墓2基で構成される。このうち4基の古墳に横穴石室が確認されるという。八皇子山1号墳(約26m)は、円墳1基とともに最高所に位置する。タコ山古墳・八皇子山1号墳は6世紀前葉～中葉の造営と見られ、その他の古墳(群)についても大半が後期の所産と考えられている。櫛古墳(19)は、櫛集落の八幡神社境内に所在する。径20mを超える円墳で、埋葬施設は切石積横穴石室である。造営時期は6世紀後葉とされる。石室は古くから開口したため岩屋戸と呼ばれており、奥壁には五輪塔などの線刻がある。1973年に県指定史跡となる。横山古墳群(18)は、前谷遺跡南の南北3kmに亘る丘陵に展開する。分布域が広いため、便宜上、任意に4～5に区分され支群として扱われている。しかし、古墳の分布は10～20基ないしは5基程度までの単位で、20～25の単位群に別れて展開している。確認される古墳は300基におよぶと言われる。また、梶袋山古墳・神奈備山古墳をはじめとする多数の後期前方後円墳の存在が知られており、継体天皇伝説に関連付けられることが多い。1959年に梶袋山古墳・神奈備山古墳の周辺と古墳群北端の中川支群の一部が県指定史跡となる。

第1表 前谷遺跡周辺の遺跡

遺跡番号	遺跡名称	所在地	種別	時代	備 考
1	前谷遺跡	あわら市(金津地区)前谷	横山古墳群	古墳	本調査地
2	10115 権守神田遺跡	あわら市(金津地区)権守	散石地	縄文	
3	10120 清原日和田遺跡	あわら市(金津地区)清原・和	散石地	縄文	
4	10088 奥野中遺跡	あわら市(金津地区)奥野	散石地	縄文~中世	
5	10103 奥野中遺跡	あわら市(金津地区)奥野中	散石地	縄文~中世	
6	10101 奥野中遺跡	あわら市(金津地区)奥野中	墳墓	縄文~古墳・中世	ダブテ製管瓦
7	10102 奥野中遺跡	あわら市(金津地区)奥野中	散石地	弥生~古墳	土師・灰田
8	10126 奥野中遺跡	あわら市(金津地区)奥野中	散石地	弥生~古墳	灰田・灰地
9	10119 網走遺跡	あわら市(金津地区)網走	散石地	弥生~古墳	灰田・灰地
10	10091 吉原石塚遺跡	あわら市(金津地区)吉原石塚	散石地	弥生~平安	灰田
11	10092 吉原石塚遺跡	あわら市(金津地区)吉原石塚	散石地	弥生~平安	灰田
12	10093 吉原石塚遺跡	あわら市(金津地区)吉原石塚	散石地	弥生~平安	灰田・灰地
13	11050 長野甲田遺跡	坂井市坂井町長野	散石地	弥生・古墳・奈良	灰田・灰地
14	10097 清原遺跡	あわら市(金津地区)清原	散石地	弥生~中世	灰田・土師
15	10080 矢地山古墳群	あわら市(金津地区)矢地	古墳	古墳	山林
16	10082 矢地古墳群	あわら市(金津地区)矢地	古墳	古墳	山林
17	10084 八雲平山古墳群	あわら市(金津地区)矢地	古墳	古墳	山林
18	矢地25 横山古墳群	あわら市(金津地区)中川・瓜瓜	古墳	古墳	山林
19	矢地32 網走遺跡	あわら市(金津地区)網走	古墳	古墳	山林
20	10116 上野原谷遺跡	あわら市(金津地区)上野	散石地	弥生~平安	灰地
21	10118 網走遺跡	あわら市(金津地区)網走	散石地	弥生~平安	灰田
22	10117 網走遺跡	あわら市(金津地区)網走	散石地	弥生~平安	灰田
23	10094 網走大野遺跡	あわら市(金津地区)網走	散石地	奈良~平安	灰田
24	10124 横山古墳群	あわら市(金津地区)横山	散石地	奈良~平安	灰田・灰地
25	10081 矢地遺跡	あわら市(金津地区)矢地	散石地	弥生~中世	灰田
26	10089 奥野遺跡	あわら市(金津地区)奥野	散石地	奈良~中世	灰田・灰地
27	10098 御妻ノ夏遺跡	あわら市(金津地区)御妻	散石地	奈良~中世	灰田
28	10096 比野遺跡	あわら市(金津地区)比野	散石地	奈良~中世	灰田・灰地
29	10103 比々田遺跡	あわら市(金津地区)比々田	散石地	平安~中世	灰田
30	10090 奥野遺跡	あわら市(金津地区)奥野	散石地	平安~中世	灰田
31	10099 全代村遺跡	あわら市(金津地区)奥野中	散石地	平安~中世	灰田・土師
32	10104 次郎木遺跡	あわら市(金津地区)比々田	散石地	中世	灰地
33	10121 清原寺遺跡	あわら市(金津地区)清原	礎石	中世	山林
34	10122 清原寺遺跡	あわら市(金津地区)清原	礎石	中世	山林
35	10081 矢地遺跡	あわら市(金津地区)矢地	礎石	中世	山林
36	10095 御妻ノ夏遺跡	あわら市(金津地区)御妻	礎石	中世	灰田・灰地
37	10108 横山遺跡	あわら市(金津地区)網走	礎石	中世	灰田
38	10107 瓜瓜遺跡	あわら市(金津地区)瓜瓜	礎石	中世	山林
39	10123 横山遺跡	あわら市(金津地区)横山	礎石	中世	灰地
40	10127 上野山遺跡	あわら市(金津地区)上野	礎石	中世	灰地
41	10114 網走大野遺跡	あわら市(金津地区)網走	瓦葺	中世	灰地
42	網走大野中世	あわら市(金津地区)網走	石造多層塔	中世	墓

梶袋山古墳・神奈備山古墳(第4図)は、古墳時代前・中期に連なる広域首长墳の系譜を継ぐ、後期の広域首长墳とされる。広域首长墳は、それまで主に松岡丘陵に営まれたが、墓域を移して6世紀前葉に梶袋山古墳・同中葉に神奈備山古墳が造営される。梶袋山古墳(前方後円墳:45m)は、段築・葺石・埴輪・周溝を備える。埋葬施設は、広域首长墳として初めて横穴石室を採用し、奥壁付近に石屋形を設置する。北東には、既に消滅したが、埴輪・周溝を備える梶袋山2号墳(前方後円墳:26m)があった。埋葬施設は横穴石室とされ、豊富な副葬品が採集されている。造営時期は梶袋山古墳と同時期である。神奈備山古墳(前方後円墳:60m)は、段築・葺石を備える。埋葬施設は切石積横穴石室で、奥壁付近に石屋形を構成した石材が残る。石室内などから多種多様の豊富な副葬品が確認されている。

金津地域の広域首长墳以外の主要古墳のうち、より優位性を備える古墳を地域首长墳とすると、各

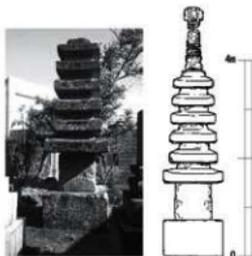


第4図 金津地域の主要古墳(縮尺1/2,000)

時期において横山古墳群中の古墳がある。その系譜は瓜生4(・5)号墳(4世紀後~末葉?)→坪江58・61号墳(4世紀末~5世紀前半?)→瓜生18号墳(5世紀中葉?)→中川70号墳(5世紀後葉?)→中川10号墳(5世紀末葉?)→中川65号墳(6世紀前葉?)→中川61号墳(6世紀前葉?)→中川7号墳(6世紀中葉?)と変遷する。そして、網走古墳(6世紀後葉)を最後に系譜は追えなくなる。

**古代** 古代の遺跡は、笹岡大野遺跡(23)・後山出戸遺跡(24)・矢地遺跡(25)・桑原遺跡(26)・御藤ノ尾遺跡(27)・北野遺跡(28)・北正田遺跡(29)がある。桑原遺跡(26)は、1977年に金津町教育委員会による発掘調査が実施され、漆器椀などが出土した。桑原庄の推定地と重複する遺跡である。

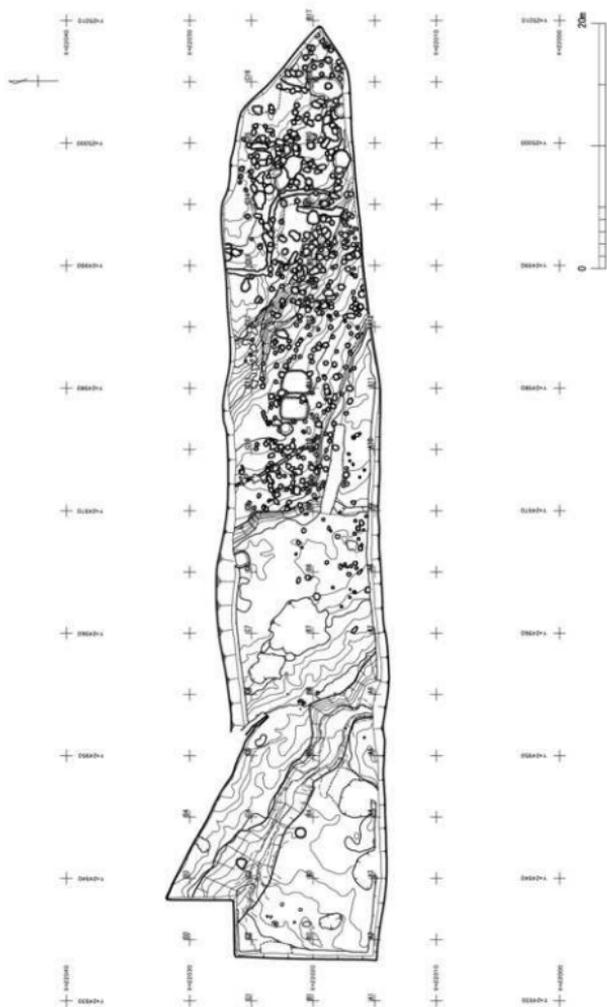
**中世** 中世の遺跡は、矢地城跡(35)・柗山城跡(37)・瓜生城跡(38)・上野山城跡(40)・タコ山城跡(15)の最高所付近)・桑原館跡(30)・今村氏館跡(31)・次郎丸館跡(32)・御藤ノ尾館跡(36)・後山館跡(39)・清滝庵寺経塚(33)・清滝北谷経塚(34)と、製鉄遺跡の笹岡向山遺跡(41)、石造多層塔の柗石塔(42)がある。笹岡向山遺跡(41)は、1991年に金津町教育委員会による発掘調査が実施され、箱型炉1基・堅型炉1基・炭窯2基とともに多くの鉱滓と鑄羽口が検出された。熱残留磁気測定による年代推定を行った炭窯は、 $1130 \pm 30$ 年・ $1150 \pm 30$ 年という年代値を示した。柗石塔(42)は、柗古墳南方の墓地に建つ近畿系の石造多層塔である。現存高約3.8mの県内最大級の規模であり、1973年にあわら市(旧金津町)指定史跡となる。相輪は落下し破損しており、伏鉢から水煙までの破片が傍らにまとめられている。伏鉢は無紋、九輪は段影で表現され、水煙は九輪の上部とは別個に表現される。屋根は、6層積み上げられた状態で残存するが、屋根の形態や通減率から最上層と2・3層目を欠失したことが考えられる。9層の屋根の上に相輪を載せると復元高は6mを超える。屋根は有垂木有反形に分類される。初層軸は中実形と見られ、基礎は無飾座で、ともに銘文などは認められない。造塔時期は15世紀初頭～前葉に位置付けられる。なお、1918年の移転時に、2層目軸上部の納入孔に納められた和鏡(流水双鳥鏡)が確認された。



第5図 柗石造多層塔 (縮尺1/100)

#### 引用・参考文献

- 国土地理院 2001 数値地図25000 (地図画像)『越前中川』(オンライン提供版)財団法人日本地図センター
- 国土地理院 2004 1:25,000土地条件図「福井」 トレース・改変
- 福井県教育委員会 1969 「北陸自動車道建設に伴う埋蔵文化財分布調査報告書」
- 福井県教育委員会 1993 「福井県遺跡地図」
- 木下哲夫編 1995 「金津町埋蔵文化財調査概要 平成元年～五年度」金津町教育委員会
- 橋本幸久編 2001 「金津町文化財調査報告第2集 遺跡発掘事前総合調査」金津町教育委員会
- 斎藤 優 1971 「横山古墳群」『文化財調査報告第21集』福井県教育委員会
- 青木忠昭 1988 「横山古墳群について -後期前方後円墳を中心として-」  
『福井県埋蔵文化財調査報告第4集 六呂瀬山古墳群』福井県教育委員会
- 中司照世 2001 「椀貸山・神奈備山両古墳と横山古墳群」『福井県立博物館紀要第8号』福井県立博物館
- 古川 登・御嶽貞義 2002 「越前地方における古墳時代 -首長墓古墳の動向を中心に-」  
『小羽山古墳群 小羽山丘陵における古墳の調査』清水町教育委員会
- 大賀克彦 2002 「凡例 古墳時代の時期区分」  
『小羽山古墳群 小羽山丘陵における古墳の調査』清水町教育委員会
- 古川 登・村上雅紀 2004 「越前地方における石造多層塔の研究 -一方山真光寺石造多層塔をめぐる-」  
『片山島越墳墓群 片山真光寺跡塔址』清水町教育委員会



第6図 調査区全体図 (縮尺1/400)

### 第3章 遺構と遺物

#### 第1節 遺構

遺構検出面は、遺物を僅かに含む包含層直下で確認される面のみである。その状況から、調査区のはほぼ全面にわたり、少なからず削平されたことが窺える。調査区の東側は、平坦面を削り出す程度の削平であるため遺構の残存状況は良好であるが、遺構構築面はほとんどが失われており、新旧の遺構が混在する。調査区西側では、水田整備などのために大きく削平されており、残存する遺構は僅かである。

検出した遺構は総数460基を超えるが、それには攪乱や動植物などの自然作用による痕跡をも含むようである。調査では、遺物を出土したもの、特徴的なものなどに限定して遺構番号を付しており、その数は90基に及ぶ(第2表)。それらの大半が性格不明の土坑であるが、井戸や溝、埋土中に木柱根と見られる痕跡の確認される柱穴がある。また、柱の痕跡は確認されなかったものの柱穴の可能性の考えられる土坑もある。その他、河川旧流路を検出した。以下、種別ごとに主要な遺構を説明する。

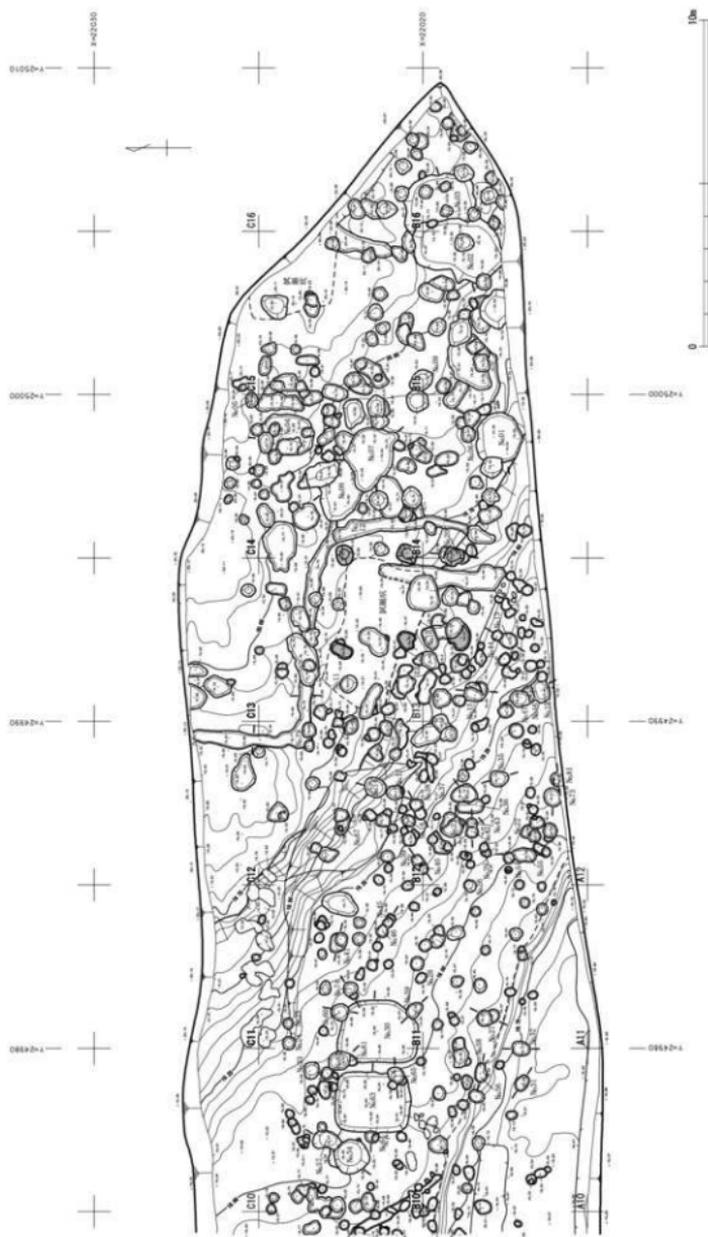
**井戸** 井戸はNo34・80がある。No34(第7・9図)は、B10グリッドに位置し、土坑No57の上に重複する。平面形は歪な円形を呈し、規模は径約1m・深さ0.9m前後である。湧水により底面から0.3m程度まで水の溜まる素掘り井戸である。出土遺物は、越前焼播鉢小片・須恵器甕体部片・土師器小片がある。

No80(第10・11図)は、調査区北端のC8グリッドに位置し、一部が調査区法面にかかる。平面形は隅丸方形を呈すようであり、規模は一辺約1.3m・検出面からの深さ0.4m前後であり、下層の砂利層をやや掘り下げている。検出面下0.1m程度で湧水した。埋土中に少量の角礫が含まれたが、石組などは確認されなかった。この周囲は大きく削平された部分に当たり、約2m東側に見られる段差によると0.5m前後削平されたようである。出土遺物は、須恵器長頸壺あるいは甎の頸部片のみである。

**溝** 溝はNo12・66・79がある。No12(第7図)は、A14・B14グリッドにて南北方向に延びる。規模は、延長約4m・幅0.2～0.45m・深さ0.1～0.22mである。底面は僅かに傾斜しており、南へ向かい低くなる。

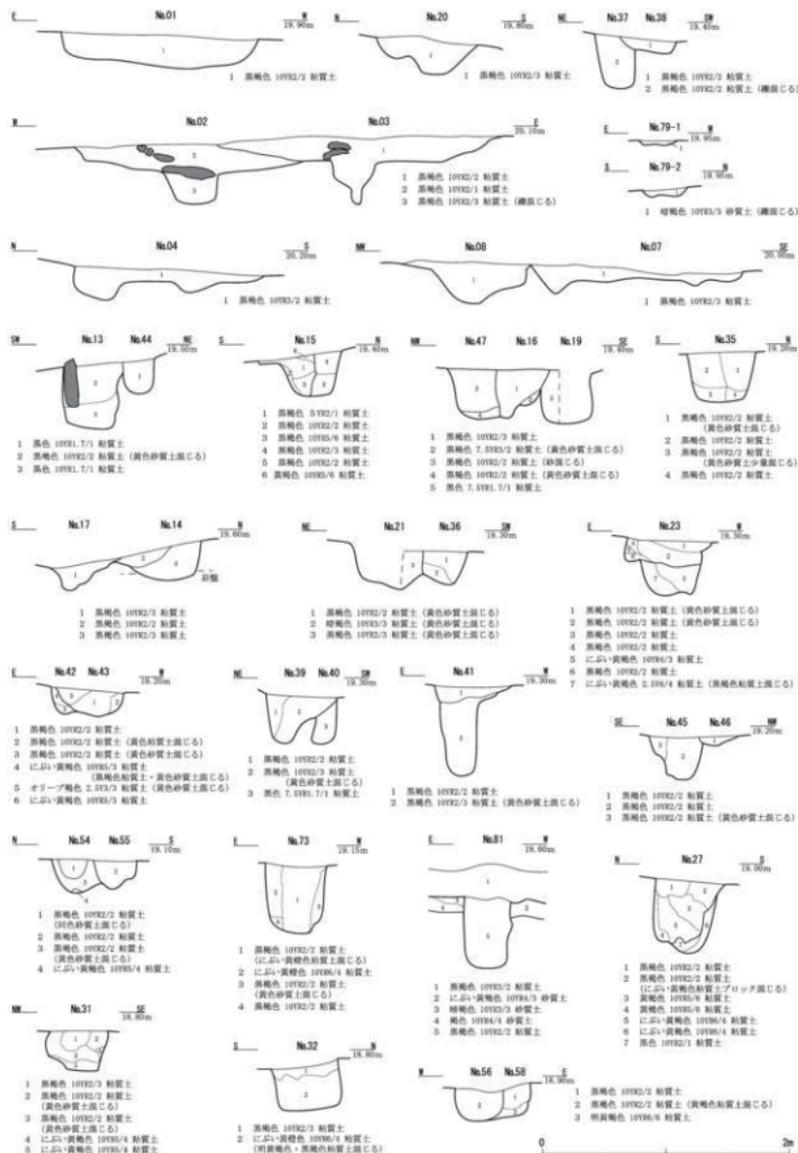
表2表 遺構観察表

No.	坑名	形状	位置	規模(m)	深さ(m)	備考
01	A12	土坑	1.8	1.2	0.2	須恵器(甕体部片)
02	A13-15	土坑	2.6	1.3	0.2	須恵器(下口遺構)
03	A13-15	土坑	2.3	2.3	0.2	須恵器(上口遺構)
04	B14	土坑	1.2	1.2	0.1	須恵器(下口遺構)
05	B14	土坑	1.0	1.0	0.1	須恵器(下口遺構)
06	B14	土坑	0.8	0.8	0.1	須恵器(下口遺構)
07	B14	土坑	0.8	0.8	0.1	須恵器(下口遺構)
08	B14	土坑	1.0	1.0	0.1	須恵器(下口遺構)
09	A12-13	溝	0.2	0.2	0.1	須恵器(下口遺構)
10	B12	溝	0.2	0.2	0.1	須恵器(下口遺構)
11	B12	溝	0.2	0.2	0.1	須恵器(下口遺構)
12	引子中込	溝	4	0.2	0.2	須恵器(下口遺構)
13	A13	土坑	0.5	0.4	0.4	須恵器(下口遺構)
14	B12	溝	0.8	0.8	0.3	須恵器(下口遺構)
15	B12	溝	0.4	0.3	0.3	須恵器(下口遺構)
16	B12	溝	0.4	0.3	0.3	須恵器(下口遺構)
17	B12	溝	0.4	0.3	0.3	須恵器(下口遺構)
18	B12	溝	0.4	0.3	0.3	須恵器(下口遺構)
19	B12	溝	0.4	0.3	0.3	須恵器(下口遺構)
20	B12	溝	0.4	0.3	0.3	須恵器(下口遺構)
21	B12	溝	0.4	0.3	0.3	須恵器(下口遺構)
22	B12	溝	0.4	0.3	0.3	須恵器(下口遺構)
23	B12	溝	0.4	0.3	0.3	須恵器(下口遺構)
24	B12	溝	0.4	0.3	0.3	須恵器(下口遺構)
25	B12	溝	0.4	0.3	0.3	須恵器(下口遺構)
26	B12	溝	0.4	0.3	0.3	須恵器(下口遺構)
27	B12	溝	0.4	0.3	0.3	須恵器(下口遺構)
28	B12	溝	0.4	0.3	0.3	須恵器(下口遺構)
29	B12	溝	0.4	0.3	0.3	須恵器(下口遺構)
30	B12	溝	0.4	0.3	0.3	須恵器(下口遺構)
31	A12	土坑	2.2	1.9	0.2	須恵器(下口遺構)
32	A12	土坑	2.2	1.9	0.2	須恵器(下口遺構)
33	A12	土坑	2.2	1.9	0.2	須恵器(下口遺構)
34	A12	土坑	2.2	1.9	0.2	須恵器(下口遺構)
35	A12	土坑	2.2	1.9	0.2	須恵器(下口遺構)
36	A12	土坑	2.2	1.9	0.2	須恵器(下口遺構)
37	A12	土坑	2.2	1.9	0.2	須恵器(下口遺構)
38	A12	土坑	2.2	1.9	0.2	須恵器(下口遺構)
39	A12	土坑	2.2	1.9	0.2	須恵器(下口遺構)
40	A12	土坑	2.2	1.9	0.2	須恵器(下口遺構)
41	A12	土坑	2.2	1.9	0.2	須恵器(下口遺構)
42	A12	土坑	2.2	1.9	0.2	須恵器(下口遺構)
43	A12	土坑	2.2	1.9	0.2	須恵器(下口遺構)
44	A12	土坑	2.2	1.9	0.2	須恵器(下口遺構)
45	A12	土坑	2.2	1.9	0.2	須恵器(下口遺構)
46	A12	土坑	2.2	1.9	0.2	須恵器(下口遺構)
47	A12	土坑	2.2	1.9	0.2	須恵器(下口遺構)
48	A12	土坑	2.2	1.9	0.2	須恵器(下口遺構)
49	A12	土坑	2.2	1.9	0.2	須恵器(下口遺構)
50	A12	土坑	2.2	1.9	0.2	須恵器(下口遺構)
51	A12	土坑	2.2	1.9	0.2	須恵器(下口遺構)
52	A12	土坑	2.2	1.9	0.2	須恵器(下口遺構)
53	A12	土坑	2.2	1.9	0.2	須恵器(下口遺構)
54	A12	土坑	2.2	1.9	0.2	須恵器(下口遺構)
55	A12	土坑	2.2	1.9	0.2	須恵器(下口遺構)
56	A12	土坑	2.2	1.9	0.2	須恵器(下口遺構)
57	A12	土坑	2.2	1.9	0.2	須恵器(下口遺構)
58	A12	土坑	2.2	1.9	0.2	須恵器(下口遺構)
59	A12	土坑	2.2	1.9	0.2	須恵器(下口遺構)
60	A12	土坑	2.2	1.9	0.2	須恵器(下口遺構)
61	A12	土坑	2.2	1.9	0.2	須恵器(下口遺構)
62	A12	土坑	2.2	1.9	0.2	須恵器(下口遺構)
63	A12	土坑	2.2	1.9	0.2	須恵器(下口遺構)
64	A12	土坑	2.2	1.9	0.2	須恵器(下口遺構)
65	A12	土坑	2.2	1.9	0.2	須恵器(下口遺構)
66	A12	土坑	2.2	1.9	0.2	須恵器(下口遺構)
67	A12	土坑	2.2	1.9	0.2	須恵器(下口遺構)
68	A12	土坑	2.2	1.9	0.2	須恵器(下口遺構)
69	A12	土坑	2.2	1.9	0.2	須恵器(下口遺構)
70	A12	土坑	2.2	1.9	0.2	須恵器(下口遺構)
71	A12	土坑	2.2	1.9	0.2	須恵器(下口遺構)
72	A12	土坑	2.2	1.9	0.2	須恵器(下口遺構)
73	A12	土坑	2.2	1.9	0.2	須恵器(下口遺構)
74	A12	土坑	2.2	1.9	0.2	須恵器(下口遺構)
75	A12	土坑	2.2	1.9	0.2	須恵器(下口遺構)
76	A12	土坑	2.2	1.9	0.2	須恵器(下口遺構)
77	A12	土坑	2.2	1.9	0.2	須恵器(下口遺構)
78	A12	土坑	2.2	1.9	0.2	須恵器(下口遺構)
79	A12	土坑	2.2	1.9	0.2	須恵器(下口遺構)
80	A12	土坑	2.2	1.9	0.2	須恵器(下口遺構)
81	A12	土坑	2.2	1.9	0.2	須恵器(下口遺構)
82	A12	土坑	2.2	1.9	0.2	須恵器(下口遺構)
83	A12	土坑	2.2	1.9	0.2	須恵器(下口遺構)
84	A12	土坑	2.2	1.9	0.2	須恵器(下口遺構)
85	A12	土坑	2.2	1.9	0.2	須恵器(下口遺構)
86	A12	土坑	2.2	1.9	0.2	須恵器(下口遺構)
87	A12	土坑	2.2	1.9	0.2	須恵器(下口遺構)
88	A12	土坑	2.2	1.9	0.2	須恵器(下口遺構)
89	A12	土坑	2.2	1.9	0.2	須恵器(下口遺構)
90	A12	土坑	2.2	1.9	0.2	須恵器(下口遺構)

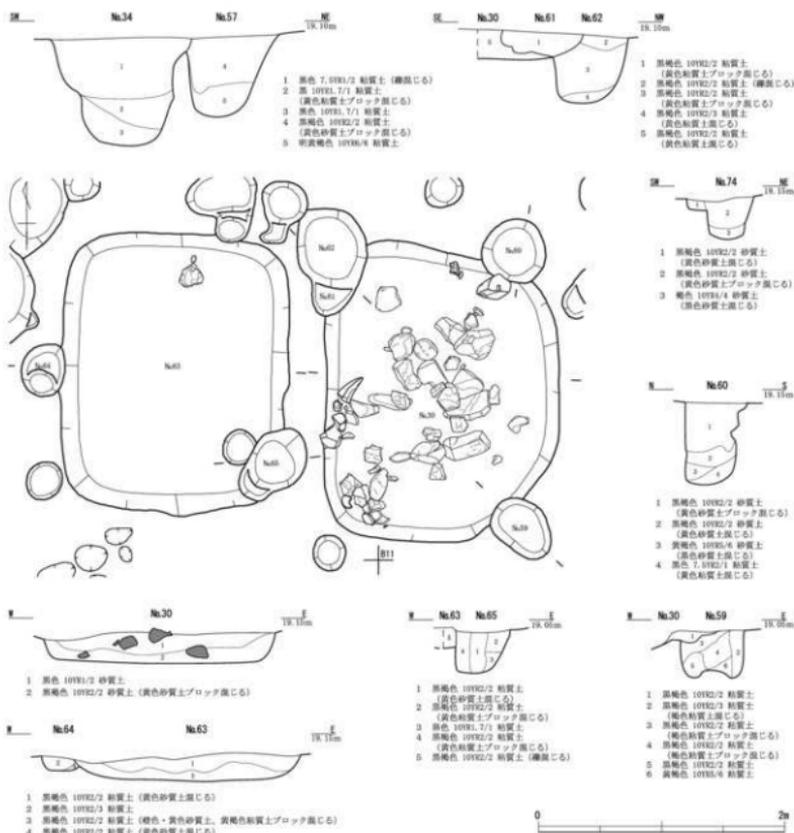


第7図 遺構配置図① (縮尺1/150)

第1節 遺構



第8図 遺構① (縮尺1/40)



第9図 遺構② (縮尺1/40)

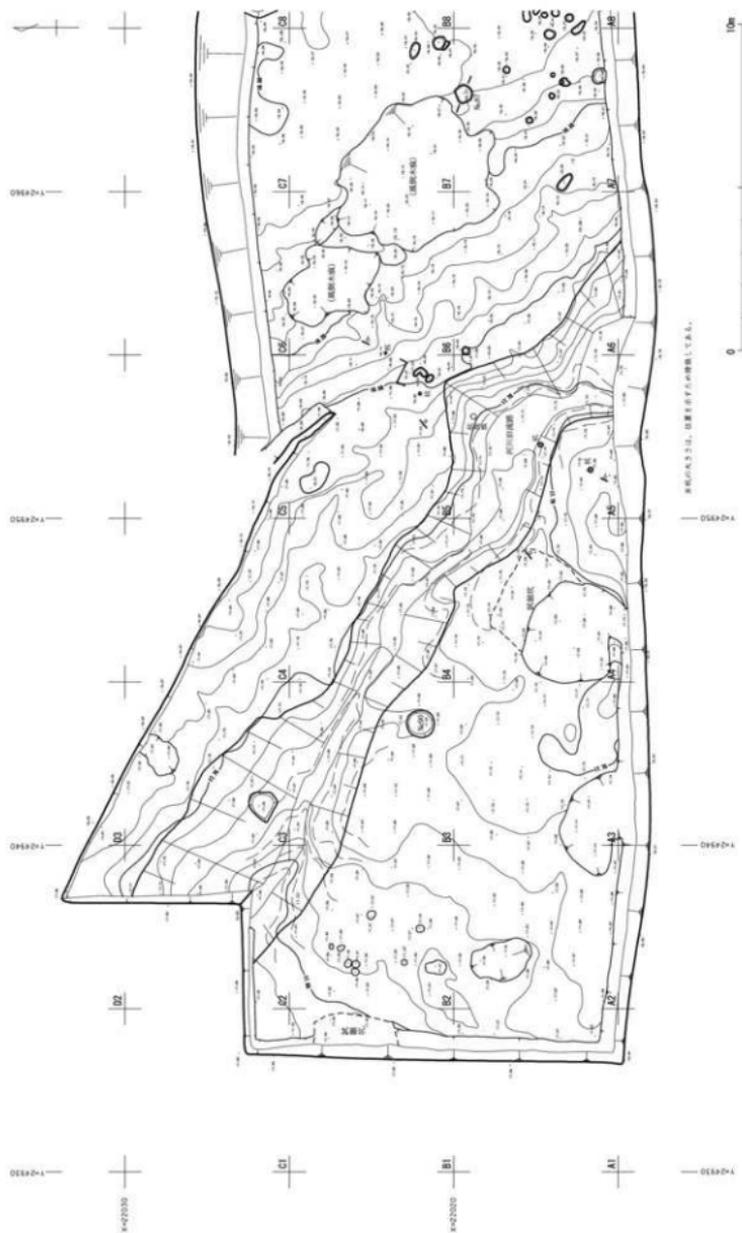
北端はNo79に接するが、両者の底面に0.1m程度の段差があり、一連の溝として機能したか否かは不明であり、存続期間の異なる可能性がある。出土遺物は、土師器小片がある。

No66(第10・11図)は、A10・B9・10・C9グリッドに亘って位置し、北西-南東方向へ直線的に延びる。規模は、延長約8m・幅0.1~0.3m・深さ0.05~0.1mである。出土遺物は越前焼掘鉢片である。

No79(第7・8図)は、C12・B12・13・14グリッドに亘って位置し、調査区北端から南へ3.5m延び、方向を変え東へ約7m延びる。幅0.2~0.55m・深さ0.07~0.16mである。No79の南北に延びる部分は、調査区北方の直線的な地境と同一線上にあり、埋土上層に近現代の物が混入するため、最近まで継続した新しい段階の溝もしくは擾乱の可能性が高い。B14グリッドでNo12と接続する。出土遺物はない。

柱穴 埋土中に本柱根の痕跡が認められるのはNo65・70・73・82(第7・8・10・11図)である。柱





第12図 遺構配置図③ (縮尺1/150)

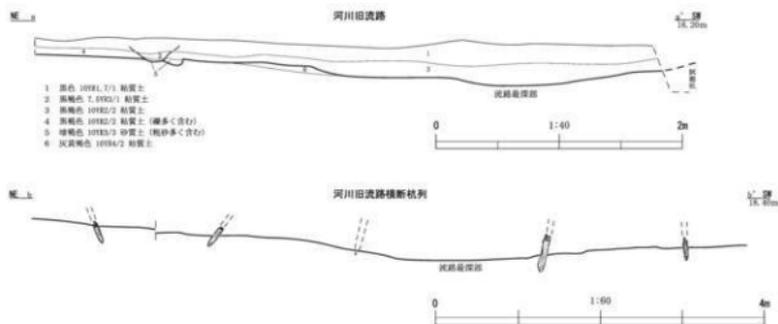
さ0.2～0.26mである。出土遺物は、比較的多量の須恵器甕破片のみであるが、完形にはならない。

No02・03(第7・8図)はA15・16・B15・16グリッドに亘って位置し、No02の上にNo03が重複する。No02は長軸2.6m・短軸1.5～2m・深さ0.2である。底面のほぼ中央にある径0.5m前後・深さ約0.25mの掘り込みに、扁平な山石が蓋のように載せられていたが、内部には何も確認されなかった。No03は長軸2.3m・短軸2.1m・深さ0.2mである。底面に径0.3～0.5m・深さ0.08～0.23mの掘り込みが複数あるが形態が一定せず、木の根などの擾乱である可能性がある。出土遺物は、No03に土師皿片や石製鉢、須恵器片があり、上に重複するNo02には越前焼の甕体部片や播鉢片、青磁・白磁碗片などがある。

No30(第7・9図)はB10・B11グリッドに位置する。平面形は歪な隅丸長方形を呈し、規模は南北2.45m・東西1.9m前後・深さ0.15～0.25mである。埋土中に亜角礫・円礫が疎らに集積する。集積には、被熱のため赤変し煤の付着する礫や破損した盤・砥石が混入しており、破棄されたものようである。出土遺物は、土師皿片の他に、陶器・須恵器・土師器などの小片がある。

No63(第7・9図)はB10グリッドに位置し、No30の西に並ぶ。平面形は隅丸長方形であり、規模は南北2.25m・東西1.8m・深さ約0.2mである。ほぼ底面直上にNo30と同様な角礫・小円礫があり、両者の関連性が窺えるが、量は僅少である。出土遺物は、越前焼と見られる陶器片・土師皿片・土師器片などがある。陶器片には、No30出土のものと同一体となると見られる破片があるが接合はしない。

河川旧流路(第12・13図) この流路は、C2・3・B2・3・4・5・A4・5・6グリッドに亘り、南東から北西へ直線的に延びつつ緩やかに下降する。規模は検出長約24.5m・幅1.8～4.8mであり、深さは右岸が0.18～0.3m、左岸が0.07～0.1mである。左岸は広く平らに削られている。A5・B5グリッドには流路に直交する杭列がある。杭は、掘削作業中にはずれてしまったものを含め、左岸に2本・右岸に3本確認した。これは堰の痕跡と思われるが、詳細は不明である。小川程度の規模ながら調査時においても絶え間ない流水があったことから、用水とされたことが窺える。流路の堆積は、調査区に展開する一連の表土・包含層が流路全域を覆うものであり、左岸削平後一度に埋め込まれたようである。

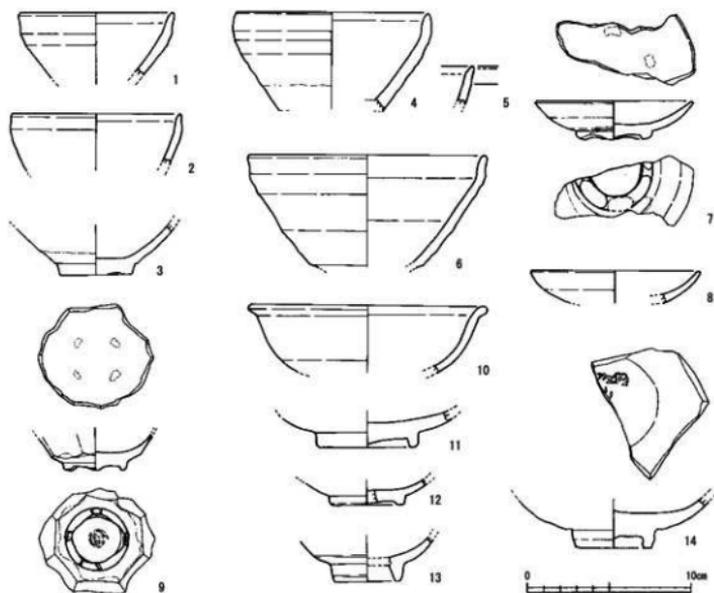


第13図 河川旧流路(縮尺1/40・1/60)

## 第2節 遺物

**陶磁器**(第14図) 天目茶碗(1～6)は、15世紀前葉から中葉で、産地は瀬戸美濃である。1・6は口縁部のやや下がった部分(以下、口唇部とする)がややくびれて立ち上がり、体部の丸みは少なく、体部から底部に向けてやや直線的である。2・5は口唇部がややくびれ、口縁端部はすぼまる。4は体部がやや丸みを帯び、口唇部はくびれることはなく、口縁端部が揃み上げられている。また4・5には割れ面に欠接ぎがみられる。3は高台内の削りこみが浅い高台で、その周辺は露胎である。次に貿易陶磁である。まず白磁(7～9・12)で、時期は15世紀である。7は挟入り高台をもつ皿である。見込みには目痕がみられる。釉は白色であるが、少し濁っている。8は皿で、白色釉が貫入している。9は挟入り高台をもつ多角杯である。やや黄色味を帯びた白色釉で、見込みに目痕がある。12は碗の平高台で、畳付・高台内部及び見込みは釉薬を剥いている。青磁(10・11・14)であるが、10は玉縁状口縁をもち、体部が張り、やや内弯気味に立ち上がる。15世紀前半である。11・14は底部が厚く、高台内面は釉を剥いていることから、15世紀後半から16世紀前半とした。また14の見込みにには印花文がみられる。13は産地が伊万里の染付で、高台側面および体部下に圈線がみられる。底部の畳付内部に砂が付着しており、重ね焼きした様子が窺われる。17世紀である。

**越前焼**(第15図) まず甕であるが、1は口縁部上端が上方に揃み上げられており、頸部は丸みを帯びつつ、やや外反する。13世紀後葉から14世紀前葉とした。2・4・5は口縁部上端が少し丸みを帯び、外上方に伸びる。頸部はやや丸みをもちつつ、やや外反する。14世紀前葉である。3は幅の広い受け口

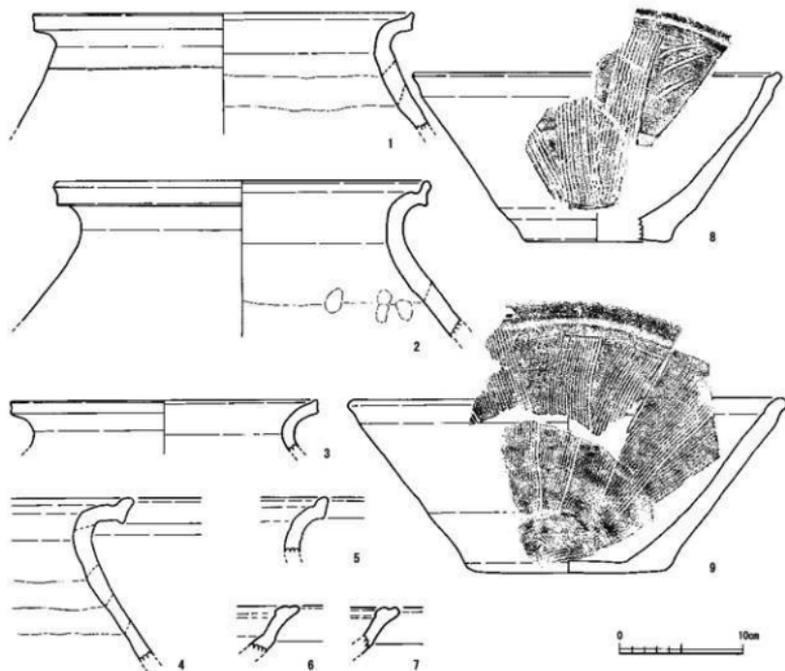


第14図 陶磁器(縮尺1/3)

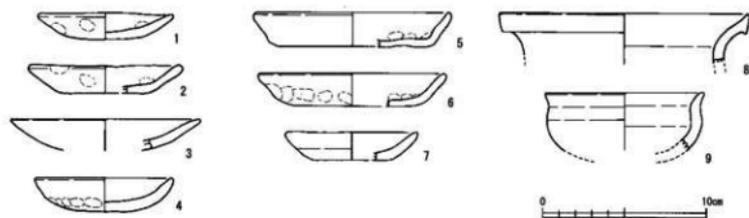
状口縁をもつことから、13世紀前葉とした。次に描鉢である。6・7・8は口縁部上面に沈線、口唇部は少しくびれている。なかでも6・7は内側の下った位置に沈線がみられる。これらの特徴から15世紀前半に位置するものとした。9は口縁部がやや丸みを帯び、口唇部がくびれているので、15世紀後葉である。

**土師皿(第16図)** いずれも灯芯油痕はみられなかった。1は口径が小さく、浅く立ちあがる。2は口縁部が丸くやや厚みをもち、腰部はややくぼんでいる。3は口縁部を薄く仕上げ、摘みナデしている。また内面にはススが付着している。4は全体的に厚く、腰部から口縁部に向かって、折れ曲がらずに緩く立ちあがる。5・6は腰部で折れ曲がって立ち上がり、腰部はややくぼむ。また5は底部にもややくぼみをもつ。7は腰部から口縁部に向かって緩やかに立ち上がる。時期として、5は13世紀、1～3・6・7は14世紀。4は15世紀である。8は甕で受け口状の口縁部をもつ。9は鉢で口縁部は外反し端部が摘みあげられている。

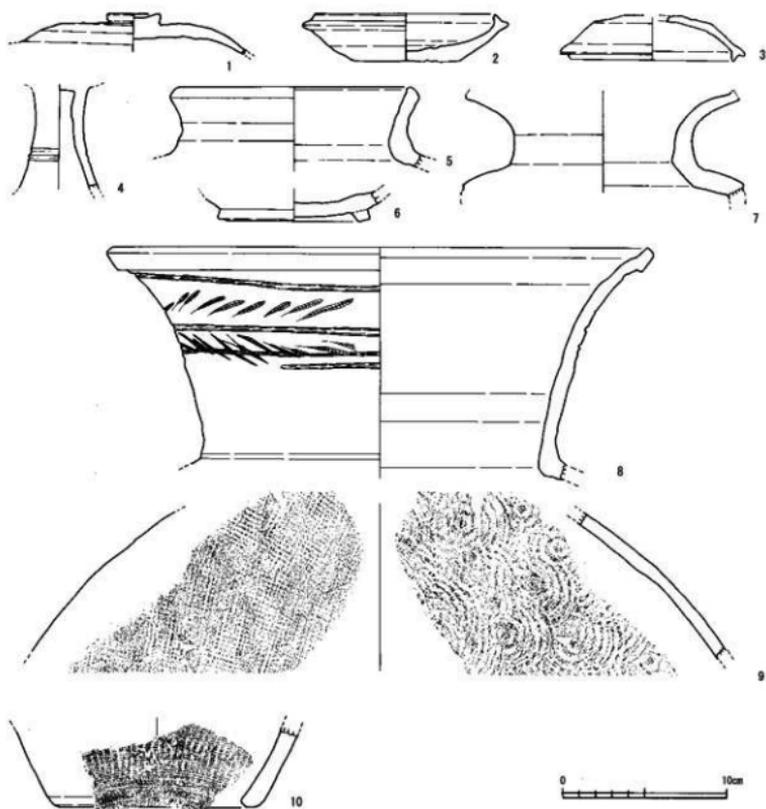
**須恵器(第17図)** 1・3は坏蓋である。1は天井部のみ残存し口縁部を大きく欠く。天井部は平らで、中央のくぼみ扁平な摘みが付く。時期は6世紀中葉とした。3は口縁部の立ち上がりは短く、やや内傾している。2は坏で、底部は平らな面であり、回転ヘラ切りののちナデを施している。また口縁部の立ち上がりは短い。2・3ともに7世紀初めである。4は高坏の脚部で、沈線がみられる。5は短頸甕で、



第15図 越前焼(縮尺1/4)



第16図 土師皿及び土師器 (縮尺1/3)

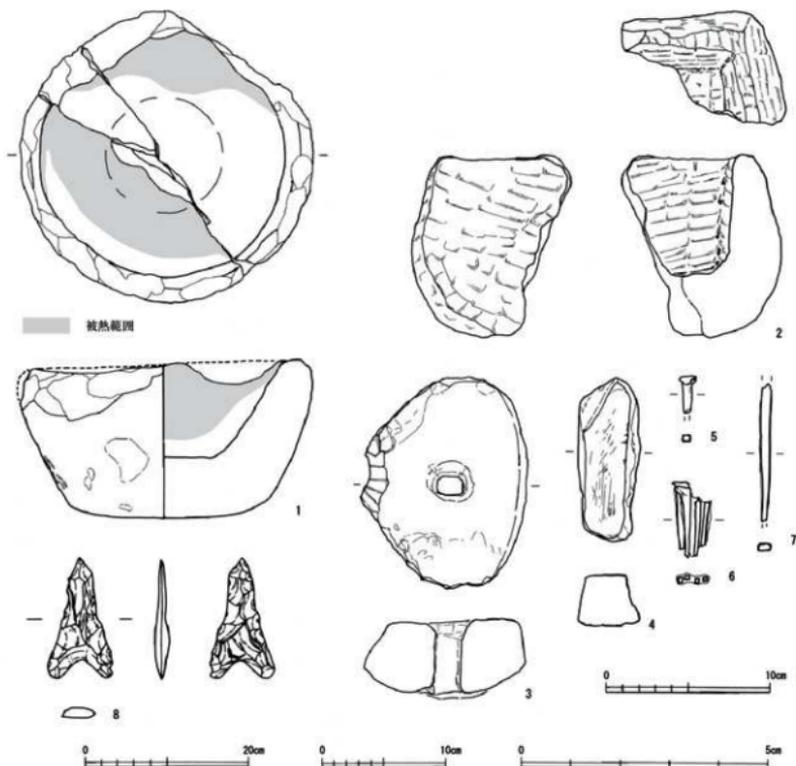


第17図 須恵器 (縮尺1/3)

口縁部はやや外に開きながら立ち上がる。また頸部から胴部につながる部分にタタキがみられる。8世紀前葉とした。6は瓶などの底部であろう。7は広口壺で、頸部から口縁部にかけて外に開き、肩部には沈線がわずかにみられる。8世紀中ごろから9世紀初めにあたる。8・9は同一遺構から出土した甕で7世紀後葉である。8は頸部に木口刺突により綾杉状に施紋する。また、沈線が3条ほどみられ、口縁部が肥厚する。9は内外面ともにタタキがみられる。10は瓶の下端部と見られる。外面はタタキのちにカキ目を、内面はタタキのちナデを施す。

**石製品・金属製品・石器(第18図)。**1は砂岩製の鉢である。内外面とも被熱しており、外面には鑿の痕跡が見られる。2は方形の容器で、凝灰岩製である。内外面とも鑿の痕跡が明確にみられ、内部に被熱痕がある。3は破損した石臼を重石として再利用したものであろう。外面に煤が付着する。砂岩製である。4は砥石で、仕上げ砥である。緑色の凝灰岩製で断面が方形の厚手で、擦痕が縦方向または斜め方向にみられる。

5～7は断面が方形の鉄釘である。6は4本の鉄釘が錆でくっついている。頸部だけの5も6から



第18図 石製品・金属製品・石器(縮尺1/6:1, 1/4:2~4, 1/3:5~7, 1/1:8)

はずれたものである。7は頭部と先端を欠損する。

8は凹基無茎の石鎌である。側縁部・脚部は直線的で、脚部先端は丸みを帯びる。基部は大きな剥離により形成される。表面はステップ状の剥離が少しみられる。裏面は、中央に剥離の際にできた大きなコブ状の突起を残しており、その除去に失敗した様子が窺われる。全体的に剥離が粗いのが特徴である。安山岩製である。

第3表 遺物観察表

陶磁器・磁石類									
図版No.	地区	遺構番号 層位	器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	成形・装束その他	備考(時期)
14-1	A13	柱穴No16	天目茶碗	9.4	—	(4.0)	鉄胎	—	15C前半
14-3	A12	土坑No22	天目茶碗	—	4.4	(2.9)	鉄胎	削山高台	15C前半
14-2	B14	土坑No4	天目茶碗	10.6	—	(3.3)	鉄胎	—	15C前半
14-4	B6	惣合葬	天目茶碗	11.6	—	(6.0)	鉄胎	削れ面に欠損あり	15C前半
14-6	A7	惣合葬	天目茶碗	11.4	—	(6.9)	鉄胎	—	15C前半
14-5	A13	惣合葬	天目茶碗	—	—	(2.4)	鉄胎	削れ面に欠損あり	15C前半
14-8	A16	土坑No3	白磁皿	10.2	—	(2.0)	白磁胎	軸は差し入れている	15C
14-9	B13	惣合葬	白磁皿	9.6	(4.6)	(2.36)	白磁胎	軸入り高台、軸が少し濁っている	15C
14-12	A6	惣合葬	白磁皿	—	(4.5)	(1.55)	白磁胎	削山高台、見込み及び高台部分・内面露物	15C
14-9	B14	溝No12	白磁多耳杯	—	3.8	(2.9)	白磁胎	軸入り高台、見込みに目録あり	15C
14-11	A11	土坑No29	青磁碗	—	6.2	(2.2)	青磁胎	削山高台、高台内面は露物	15C後半～ 16C前半
14-14	A16	土坑No3	青磁碗	—	4.6	(3.2)	青磁胎	見込みに欠損あり、高台内面は露物	15C後半～ 16C前半
14-10	A6	惣合葬	青磁碗	11.4	—	(4.1)	青磁胎	厚輪縁反側で口縁が歪曲状である	15C前半
14-13	C5	惣合葬	碗	—	(4.0)	(2.6)	灰付	削山高台、底脚に印が付き	17C
15-5	B11	惣合葬	甕	—	—	(4.5)	—	灰黒に反側	14C後半
15-3	A6	惣合葬	甕	12.8	—	(2.9)	自然胎	—	13C前半
15-1	A6	惣合葬	甕	13.0	—	(9.4)	自然胎	—	13C後半～ 14C前半
15-2	B2	惣合葬	甕	13.0	—	(11.3)	—	—	14C前半
15-4	B2	惣合葬	甕	—	—	(12.8)	—	—	14C前半
15-6	B11	土坑No30	樽鉢	—	—	(3.8)	—	15-6、15-7は同一個体	15C前半
15-7	B10	土坑No3	樽鉢	—	—	(4.7)	—	15-6、15-7は同一個体	15C前半
15-8	A8	惣合葬	樽鉢	13.0	(11.9)	13.8	—	横目14表	15C前半
15-9	B13	惣合葬	樽鉢	13.0	(11.8)	(14.2)	—	横目14表	15C後半

土器類									
図版No.	地区	遺構番号 層位	器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土・色調	成形・装束その他	備考(時期)
16-4	B13	柱穴No11	土鍋皿	8.4	—	2.1	褐色	手捏ね、指おさえのち、皿ノリナデ	15C
16-3	A15	土坑No2	土鍋皿	(11.4)	—	1.9	にじみ褐色	手捏ね、指おさす。内面にヌベが薄	14C
16-2	A9	土坑No48	土鍋皿	9.3	—	1.7	にじみ褐色	手捏ね、指おさすのち、皿ノリナデ	14C
16-1	B10	土坑No3	土鍋皿	8.2	—	1.55	にじみ褐色	手捏ね、磨減が強い	14C
16-5	C1	惣合葬	土鍋皿	(12.0)	(9.8)	2.1	にじみ褐色	手捏ね、皿ノリナデのち、指おさす	15C
16-6	B4	惣合葬	土鍋皿	(11.0)	(7.8)	2.0	褐色	手捏ね、指おさす。磨減が強い	14C
16-7	B7	惣合葬	土鍋皿	8.0	(2.8)	1.7	褐色暗赤	手捏ね、指おさす。磨減が強い	14C
16-8	A14	惣合葬	甕	(24.8)	—	(2.8)	褐色	回転ナデ	時期不明(13Cか?)
16-9	B4	惣合葬	鉢	9.6	—	(3.5)	灰白底	回転ナデ	時期不明(13C～9C?)

遺風類										
図版No.	地区	遺構番号 層位	器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土・色調	装束	成形・装束その他	備考(時期)
17-3	B6	惣合葬	埴土	9.9	—	5.4	灰白底	良	回転ナデ	7C初期
17-1	A6	惣合葬	埴土	—	—	(2.1)	灰白底	良	天井部を回転ヘラ切り	6C中葉
17-2	A7	惣合葬	埴土	(10.8)	—	2.9	灰白底	良	回転ナデ、底部は回転ヘラ切りのちナデ	7C初期
17-1	A7	惣合葬	灰白底	—	—	—	良	良	自然胎	8C前半
17-5	A14	土坑No1	始輪受	(7.0)	—	(4.1)	灰白底	良	内面タタキ	8C前半
17-6	A16	土坑No3	甕	—	(9.6)	(1.9)	灰白底	良	回転ナデ、高台粘付	8C後半か? 時期不明
17-8	A14	土坑No1	甕	(32.4)	—	(14.4)	灰白底	良	胴部に木口を塗り粘付、外面中に泥積	7C後半
17-9	A14	土坑No1	甕	—	—	—	灰白底	良	外面は半打タタキ、内面は同心タタキ	7C後半
17-10	A6	惣合葬	甕	—	9.8	(4.5)	灰白底	良	外面は方ナ目、内面タタキのちナデ	時期不明
17-4	A10	土坑No31	高杯脚部	—	—	—	灰白底	良	—	7C前半

石製品									
図版番号	種類	出土地点	計測値(cm)				石材	備考	
		クワッド	遺構・地底	全長	幅	厚さ	重量		
18-1	鉞	A15	土坑No5	19.3	36.4	7.6	砂岩	内面から口縁部外面にかけて縦筋による意匠・彫刻	
18-2	笄	B11	土坑No30	14.7	(10.3)	6.2	凝灰岩	方形 内面内端一隅のみ縦筋 内部に縦筋	
18-3	東石	A15	土坑No2	17.2	12.9	6.4	砂岩	彫刻した石の再利用品? 底面に縦筋	
18-4	砥石	B11	土坑No30	13.4	5.1	4.1	凝灰岩	上面に研ぎ跡 下面に成形時の磨痕残	

金属製品									
図版番号	種類	出土地点	計測値(cm)				備考		
		クワッド	遺構・地底	全長	幅	厚さ	重量		
18-7	釘	B10	井戸No34	8.4	—	0.7	—	環部・条溝欠丸	
18-5	釘	B10	土坑No3	2.3	—	0.4	0.6	1.1	5とほと縛着
18-6	釘	B10	土坑No3	4.6	—	—	2.3	—	4本縛着 もとは5と縛着

石函									
図版No.	地区	遺構番号 層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
18-8	A6	惣合葬	石函	24	14	0.2	0.61	安山岩	コブ状の突起を残している。全体的に剥離が粗い。

## 第4章 ま と め

前谷遺跡は、縄文時代の遺物が散布する遺跡として周知されていたが、古代・中世の遺構・遺物が確認され、これらの複合する遺跡であることが確認された。ただし、調査区全体におよぶ削平のため、遺構の残存状況は良好なものではなかった。

検出した遺構には、ほぼ等間隔に並ぶ柱穴列がいくつか確認されており、平面的に四角く建物状に並ぶ一連の柱穴も確認できるが、柱穴とする土坑の深さが著しく異なるものばかりである。唯一、柱穴No.20を南東の角として、南北を長軸とする1間×2間の建物が想定される(第7図)が、柱間がやや不揃いで平面形が上げた長方形となるため、確実なものではない。そのため、掘立柱建物を構成する柱穴群を特定するには至っていない。また、礎石のような石材も全く確認されないため、礎石建物の存在も不明である。

遺構の時期は、埋土中に遺物を含む遺構が総遺構数の1割程度であり、それら以外については特定し得ない。遺構埋土中に遺物が含まれる場合でも、ほとんどが小片となっており、多くが異なる時期のものとの混在する。そんな中で須恵器のみが出土する遺構として、土坑No.1・31・柱穴No.27・28・41・井戸No.80がある。柱穴出土の須恵器は細片となり磨滅が著しいが、それ以外は遺構の時期を示すものと捉えられる状態であり、少なくともそれらは古代(7・8世紀頃)の遺構である可能性がある。また、土師器のみが出土する遺構もあり、その多くが磨滅した細片で土師皿との区別さえ困難な状態ではあるが、それらも同時期の遺構である可能性がある。

この他、土師皿・陶磁器片の認められる遺構は、おおまかに中世以降の所産と捉えざるを得ない。しかし、出土遺物の大半が概ね15世紀を前後する時期の所産であり、15世紀中葉～16世紀代が存続期間の中心となるようである。なお、包含層から古墳時代後期の須恵器片(TK10・TK217)が、若干ながら出土しており、周辺に展開する横山古墳群(とくに中川支群)や棚古墳との関連が予想される。

また、縄文時代の遺物は石鏃のみであることから、縄文時代の遺跡としては北縁に当たることが考えられるが、その位置はこれまで周知とされた前谷遺跡の範囲に一致する。今回確認した古代以降の遺構・遺物の分布は現在の前谷集落下層へ続く状況であることから、古代以降の遺跡としては北限がさらに北方に拡大するものと考えられる。

以上のように、調査区全体が削平を受けており、遺構の残存状態は良好ではなかった。包含層についても、度重なる改変を受けたことにより、遺物が混じり合う様な状況となっていた。また、埋土中に遺物を含む遺構は少なかった。このような状況であったため、遺構の性格・時期などを把握することは困難であり、前谷遺跡の内容の詳細に触れることは不可能である。しかし、輸入陶磁器を含めた青磁・白磁・天目など多種の陶磁器類が確認されることから、ある程度優位な人物の屋敷が近辺に存在したことを推測することができよう。

前谷集落は、西側に近接して古代北陸道が通り、三尾駅が所在したと見られる御簾ノ尾地区に近在する。中世において北陸道は西へ大きく移り細呂木(細呂宜間)を通るルートとなるが、もとの街道は近世にも丸岡を經由し竹田時や市野々峠などへ向かうルートの幹道や北陸道のバイパス的な裏街道として存続しており、さらに現在の国道8号線へ引き継がれている。前谷集落は街道沿いの集落として継続したようであり、特に15世紀後半～16世紀にかけて発展したものと見られる。

## 中世坪江上郷と前谷遺跡

中世の坪江上郷<sup>①</sup>の中で、前谷遺跡の周辺がどのような環境であったかを述べたうえで、前谷遺跡について考察していく。

前谷<sup>②</sup>は、興福寺大乗院跡領の荘園である坪江荘の坪江上郷の一部に比定されている。この坪江上郷に属している地域の遺跡については、乗兼・坪江遺跡が調査されており、貿易陶磁器や目玉が出土している点や遺構の検出状況から、坪江上郷の中心である可能性が高いことが指摘されている<sup>③</sup>。また、前谷遺跡と乗兼・坪江遺跡ともに、同型式の白磁(第15図7)が出土しており、同時代の遺跡であることが指摘できる。

次に、寺院や経塚など宗教的環境に着目すると、本遺跡の周辺は天台宗の影響下にあったと考えられる地域である。本遺跡の南東側に位置する松竜寺<sup>④</sup>は、養老年間(717～724年)に帝釈天を祀るために奉澄によって開かれたと伝えられる元天台宗の寺院である。本遺跡から東に約2kmに位置する、あわらし清滝庵寺からは、安元2年(1176年)の記年銘と「河内」の地名を記された経筒(第19図、第3図・第1表33)<sup>⑤</sup>が発掘されている。清滝地区の南方には、白山信仰の拠点であり13世紀に延暦寺の末寺となった豊原寺跡がある。清滝に経筒が埋納された理由については、白山から南下すると、標高576mの剣岳に達し、剣岳から西へ平野を目指して下りてくると、平野部との境に清滝が立地しているという推定がなされている<sup>⑥</sup>。松竜寺の裏手には、「朝倉始末記」にも記述されている、永正元年(1504年)から同4年(1507年)にかけての一向一揆と朝倉氏の主戦場となった帝釈堂があったとされ、この戦で松竜寺とともに消失している。こうした周辺環境から、13世紀前後から16世紀にかけての前谷遺跡周辺は、天台宗の影響下の地域であったと考えられる。



第19図 経筒拓本 (S=1/3)  
『金津町の文化財』から

当時の交通路<sup>⑦</sup>については、坪江から、中川、前谷を経由し熊坂、牛ノ谷へと抜けるルートが、越前-加賀間を通る街道の一つであった。また、棚から前谷の裏手を通り、権世野々を経由し風谷峠を越えて現石川県山中村に至る街道がある。それゆえ、本遺跡が位置する地域一帯は、越前と加賀間を結ぶ交通の要衝と言える。前谷が面している街道が、当時の越前と加賀間の人とモノの流通路であり、そこに貿易陶磁器も含まれていて、貿易陶磁器や目玉などの奢侈品を入手可能な環境であったことと、それらを入手できる社会的に高位な人々(寺院関係者か荘園関係者)の存在が、前谷遺跡とその周辺にあったのではないかと考えられる。

### 註

- 1 清田善樹1993「河口・坪江荘」『講座日本荘園史6 北陸地方の荘園・近畿地方の荘園1』吉川弘文館
- 2 金津町教育委員会編1985『金津町坪江の郷土史』金津町教育委員会
- 3 中川佳三編2006『乗兼・坪江遺跡』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 4 金津町教育委員会編1985『金津町坪江の郷土史』金津町教育委員会
- 5 金津町文化財保護委員会編1982『金津町の文化財』金津町教育委員会
- 6 伊藤純1989『福井県金津町出土の経筒をめぐる—十二世紀の越前と河内—』『地方史研究』217, 地方史研究協議会
- 7 福井県教育委員会編2001『歴史の道調査報告書第1集』福井県教育委員会

# 写 真 图 版



(1) 調査地遠景 (東より)



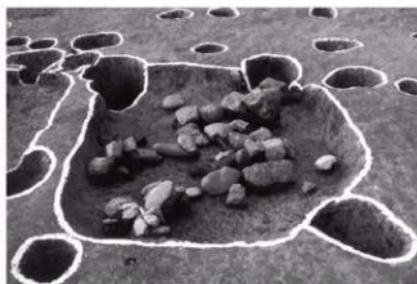
(2) 調査地遠景 (西より)



(3) 調査区全景 (真上より)



(4) 土坑No.60 (南より)



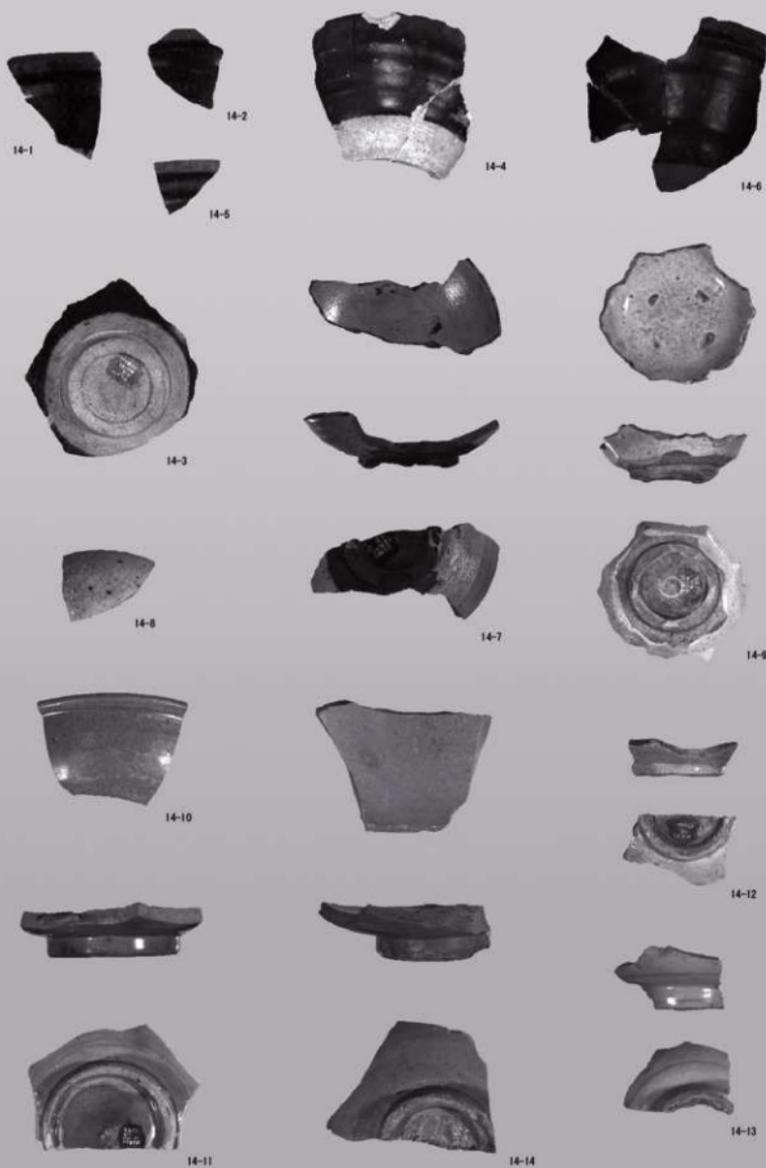
(5) 土坑No.36 (南より)

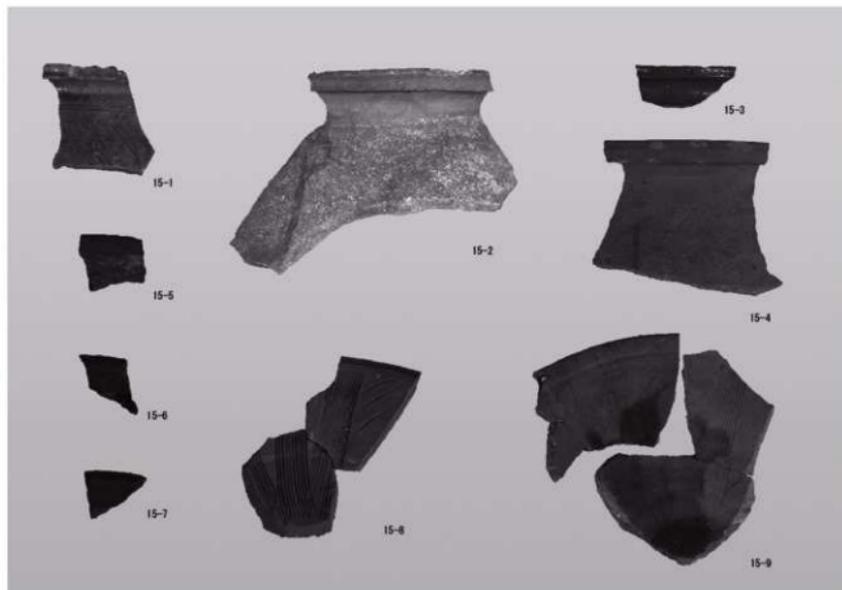


(6) 溝No.66周辺 (南東より)

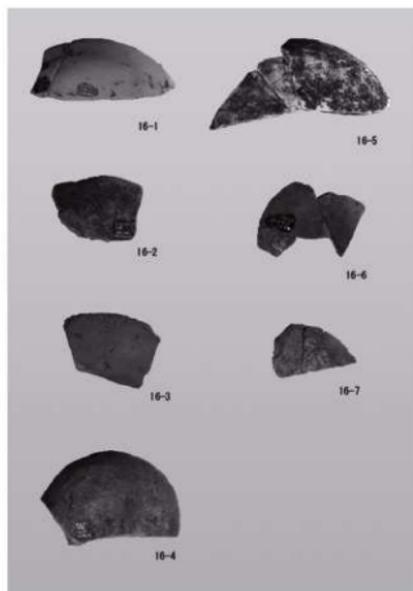


(7) 遺構の集中する調査区西側 (南西より)

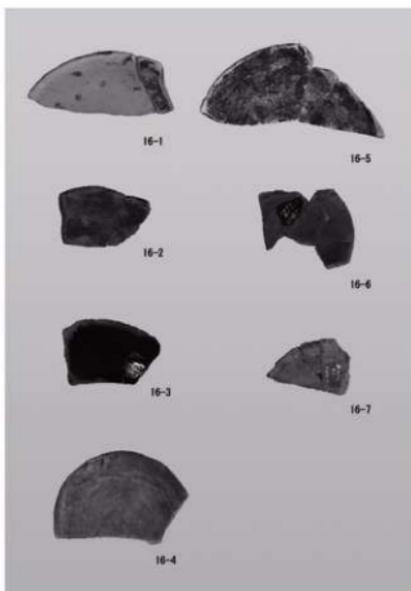




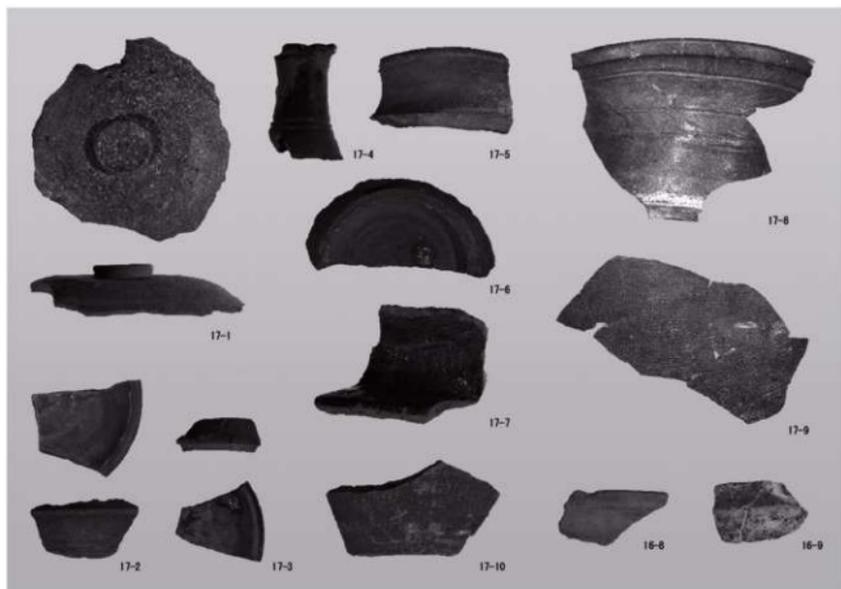
(1) 越前焼



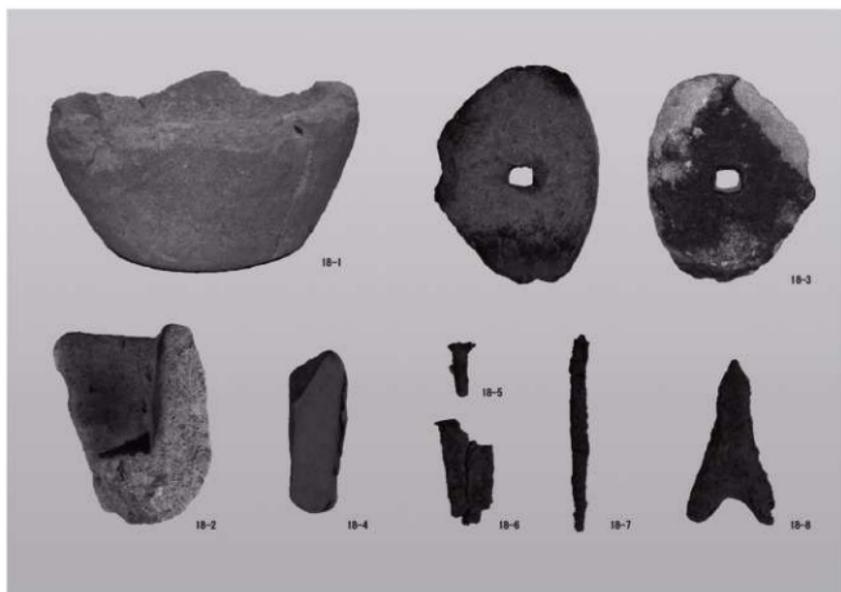
(2) 土師皿 (外面)



(3) 土師皿 (内面)



(1) 須恵器・土師器



(2) 石製品・金属製品・石器

報 告 書 抄 録

ふりがな	まえだにいせき							
書名	前谷遺跡							
副書名	県道中川松岡線道路改良事業に伴う調査							
巻次								
シリーズ名	福井県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第115集							
編著者名	御嶽貞義 土谷崇夫 岩田直樹							
編集機関	福井県教育庁埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒910-2152 福井県福井市安波賀町4-10 TEL: 0776-41-3644							
発行年月日	西暦 2009年12月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
まえだにいせき 前谷遺跡	ふくいけん 福井県 あわら市 まえだに なかがわ 中川・ きた 北	18208	10097	36° 3′ 31″ ～ 36° 3′ 49″	136° 13′ 34″ ～ 136° 13′ 55″	平成19年 4月2日 ～ 平成19年 6月29日	1,100	県道中川松 岡線道路改 良事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
前谷遺跡	集落	中世  古代  縄文	土坑・溝・井戸など  土坑		陶磁器・土師皿・石 製品・金属製品  須恵器・土師器など  石鏃			
要 約	<p>前谷遺跡は、これまで縄文時代の遺跡とされてきたが、古代・中世も含む遺跡であることがわかった。遺構は、土坑・溝・井戸のほか柱穴があるが、建物を構成するものはなかった。遺物は、ほとんどが表土・包含層から出土し、過去の改変の影響により混じり合うような状況であった。なお、確認した遺物は、15・16世紀のものを中心とする。</p> <p>遺構・遺物の分布は現前谷集落の下層へ展開するようであり、遺跡の範囲はさらに北へ広がるものと見られる。</p>							